



.....

目次：

新TOEIC・TOEFL iBT	1
トンネル版 aQ 直伝 (2)	2
ミニコラム：芸術学部 柳先生	3
デジタルラボ：Producer2003	3
広島 CALL 研究会 青木副学長	4

新 TOEIC 3つの変更点

The cover of the TOEIC New Official Question Book (2nd Edition) features the TOEIC logo at the top left. The title "TOEICテスト" is prominently displayed in large black characters, followed by "新公式問題集" in a slightly smaller font. Below the title, there are several images: a person's hands holding a CD, a CD with the number "2" and "2nd Edition" (2版), and a collage of four small photos showing people in various settings. At the bottom, the publisher's name "新井洋行 人間関係・コミュニケーション・TOEIC運営委員会" is printed in small text.

- これらの変更のほかに、リスニングセクションでは従来のアメリカ英語に、イギリス英語、オーストラリア英語のアクセントが加わり、多様な英語を聞き取る力が要求されるようになりました。では、2007年1月14日に行われた公式テストを受験した国際学研究科博士前期課程1年大杉英毅さんの体験談をご紹介します。

TOEFL iBT スピーキング登場

ETS *The People Who Make the Tests*

THE
Official Guide
TO THE
NEW TOEFL iBT

CD-ROM with Authentic TOEFL iBT Listening

- Find out all about the new TOEFL iBT exam from the source
- Practice with more than 100 and TOEFL iBT questions and essay topics
- Find ETS sample questions in audio format

- また、各セクションの出題量や形式もリニューアルし、今まで以上に英語運用能力が要求されるようになりました。それでは、2006年12月に福岡留学センターでTOEFL iBTを受験した国際学部2年生の西森千尋さんの体験談をご紹介します。



西森さんは目標点を目指してさらに挑戦を続けるそうです。大幅な変化を遂げたTOEFLを制するには、十分な試験勉強と精神力が不可欠。またじっくり時間を掛け、その場限りでない、真の英語運用能力を身につけることがiBT試験を制する一番の近道なのではないでしょうか。

家庭教師とパソコン教師

先回は、飲む人の姿をしらふで見る酒場のアルバイトは人格涵養に良い、というQくんのメールを紹介した。あのメール、飲むと品が崩れる教師への訓告であり、落とすな品を、という教育心からのものであったようにも今、思う。ところでQくんは飲食業従事のほかにも家庭教師のバイトをはじめた模様。次は「最近書いた文章です」の前書きで送付されてきたQくんの家庭教師論。家庭教師派遣企業であるS社にQくんが登録時、提出した文章だ。S社は登録希望者に小論文を課しているらしい。

どのような家庭教師が望ましいのか。良い家庭教師であるには何が大切なのか。私の経験をとおして考察したところを述べる。

ひとつには、「できない」生徒の側に立てるということだ。自分には十分わかっていることを、まだ全くわかってはいない人に教えるのである。すでに理解した人間がまだ理解できていない人間の立場に立ちうるか否かについては、教科内容に対するのとは別種の、人間に対する理解と対応が求められる。

私の中学校時代は完全な「おちこぼれ」であった。小学校のときにローマ字を覚えなかったため、中学に入っても英語が全くできず、アルファベットは単なる記号の連なりであった。転機は中学2年のときに家庭教師の先生に就いたことである。その後、英語と数学の基本的な「仕組み」を覚えた私は、それにそって自学自習をはじめ、半年程度でクラスにおいて勉強が「できる」側の生徒になった。しかしあの頃の、とにかく勉強が理解できなかった自分の感情、苦しみはよく覚えている。そういった「できない」生徒の気持ちを家庭教師はまず理解せねばならない。その生徒の現段階を無条件に受け入れて、その地点からともに成長する態度で出発すべきである。

ふたつには、質問をしやすい人柄であることだ。理解できない箇所やどうも腑に落ちない点を誰はばかることなく、徹底的に尋ねられるのが家庭教師というシステムの良いところである。それであるのに、質問するのがはばかれるような厳格な人柄の先生では、生徒は学校や塾での疑問点を家庭教師でも解消できないままになってしまう。そして質問を受けた際、質問をするという行為自体を評価することが重要である。以前と同じ質問を受けても毎回ていねいに答えられる忍耐強さの持主である

ことは人徳であるが、家庭教師としては当然の義務である。わが身を振り返ってみても、数分前に辞書で引いた単語と気づかず、また引きなおしていた自分の忘れやすさに呆れたことは数知れない。しかし人間が勉強することとはそのような回り道や非効率性を必然として伴いつつ前進するものだと思う。

勉強が理解できる喜び、中味のつまった勉強をしたという充足感、テストで良い点を取ったときの達成感、これらは中学生、高校生の10代のみがその時期、体験できる幸福だろう。そして自分のあこがれる進路や志望校が定まってくれば、生徒自身が自ら勉強に積極性を見出すだろう。家庭教師の仕事は生徒を勉強が理解できるグラウンドに立たせ、そのあとは毎回の授業によって知識が伸びる実感と、学ぶ意欲と刺激を与えることではないか。その勉強の過程で生徒がそれをいちだん高め、知的なものに対する憧れと尊敬を持つに至ればもう言うことはない。

Qくんの家庭教師論に触発されて、あるいは対抗して、ワタクシがここで、やおら大学教師論を開陳し

たりはしない。話のつづきは、パソコン教師に語ってもらおう。

1930年生まれの中西成美さんは66歳で退職、その年パソコン購入、3年後パソコン教師資格取得。シニア（老人）のためのパソコン教室（個人教授形式）を設立した。83歳の生徒さんもいる。その中西さんの述懐。「シニアの方へ教えるには、シニアの気持ちがわかる人がいい。年齢に関係なく、教わる人の気持ちで教えられるということが基本」。

何度も同じことを質問するシニア。他のシニア生徒が嫌な顔をする。あげく質問したくても自分の質問が授業の妨害になっているのではとつい質問ができなくなる、そういう気分が支配的になりませんか。中西さんいわく、「私のモットーは『質問はどんなことでもOK。何度同じことを聞いてもOK』です」。だからやはりマンツーマンが理想なのだ（以上の中西さんの話は徹頭徹尾、荒川じんぺい著『パソコンでいきいき人生』岩波書店03年、92-96頁、に拠っています）。

話の結着はどこにするか。ここだ。広島市立大学学部で1学年で、学生2人に教師1人の勘定。このマンツーマンを活用しない法はない。厳格一途なんて先生はいないみたいだよ。

（無芸院湿黒采）



「大きな世界へ」



二年前にこちらの大学に身を置きました。芸術学部現代表現領域(CA+T)という所で現代美術を教えています。現代美術の世界は今日的なテーマを国境や言語、宗教を越えて語り合いそして対峙しあう共通言語としての機能があります。ある意味、言葉を必要としない視覚芸術だからこそ可能なのかもしれません。しかし、言語をまったく必要としないわけではありません。語りつくして語りつくせない「何か」が視覚芸術の形をとって現われてくるとも言えます。

アメリカ、イエール大学大学院に留学していた当時、毎週のようにクリット=批評会が繰り返され、耐えられない学生は退学する者もいました。わたしはまったく言語的に付いていけず、そのおかげで作品の方で反論出来ない様な物を作ってやれと奮起し耐えられました。人種、言語、宗教、多様な背景をもった学生や先生たちとのぶつかり合いは日本では得られない経験です。

現在CA+Tの学生は三人に一人が留学しています。特に提携校のあるドイツが多いのですが、それというのも先輩たちが蓄積してきた情報が財産となっているようです。わたしの頃は僅かな情報しかなく苦労した覚えがあります。この学生たちは機会に恵まれています。もっと大きな世界にぶつかっていく野心をもってもらいたいと思います。

楽々デジタルラボ 其の一

Producer 2003 でプレゼン映像とスライドを統合する

語学センター・語学教務員 堀本 真由美

目的：映像とPowerPoint ファイルを組み合わせて保存、または自習用に配布する

種別：オーサリング

素材：1. プレゼンを撮影した映像
2. プレゼンで使用したスライド
*今回は、センター教室で撮影し、DVD-Rに録画・ファイナライズした映像と、PowerPoint ファイルを使用

ツール：映像変換ソフト (DVD→mpeg4→avi ファイル)

Producer 2003

CDへの書き込みソフト

発行形態：CD-R



◆ Producer できあがり画面。右上の映像は、上下2分割の教室録画。

WebやPCで扱うデジタルコンテンツはなるべくシンプルな工程で短時間に作成したいものです。語学学習の性質上、音声や映像を常に扱ってきた語学センターから、関連の情報をご提供していく新コーナーを開始いたします。

最初にご紹介するのは、Producer 2003です。一般に利用者の多いMicrosoft Officeですが、これは、その中のプレゼンテーションソフトであるPowerPoint用のアドオンソフトで、Microsoft Officeのサイトから無料でダウンロードできます。(http://www.microsoft.com/japan/office/previous/2003/powerpoint/producer/prodinfo/default.mspx) このソフトを使用すると、映像や音声をPowerPointのスライドと統合できます。既に行ったプレゼンテーションの映像とスライドを組み合わせて保存できるだけでなく、新たな手間なくそのまま自習用コンテンツとして配布することもできます。また、ナレーションを入れたり、パソコンの画面操作を録画することもできます。

今回は、青木信之副学長が12月に広島CALL研究会で行われた(p4参照)、36分強のプレゼンテーションを撮影したDVDとスライドをお借りしました。一番時間がかかったのは、DVD録画映像をパソコンファイルに変換する素材準備作業でした。素材が元々、mpgなどのムービーファイルであればこの手間は省けますし、デジタルビデオからの取り込みも選択できます。Producer 2003での各ファイルの取り込みはスムーズでしたが、取り込んだ映像を見ながらのスライドのタイミング設定作業に少し手間取りました。しかし、これも自分のスライドであれば、タイミングを熟知しているため、素早くできると思われます。発行作業には、多少時間がかかりました。パソコンで映像を扱う場合、作業効率がパソコンのスペックに大きく左右されるので、この部分は待つしかありません。発行が終了したら、あとは書き込みソフトを使ってCD-Rに書き込むだけです。発行時の選択肢としてWebもありますが、ムービー等大容量のファイルの場合、通常のWebサーバに置くのは現実的ではないので、ここでは取り上げません。

Producer 2003は痒い所に手が届く、とは言えない部分もありますが、基本的な作業はウィザードに従うだけでとても簡単です。取り込める素材のファイル形式など、詳細は上記サイトをご参照ください。

*ご質問、情報交換、リクエストなどは、語学センター宛にメールでお寄せください。

語学センターにて「広島 CALL 研究会」を開催

国際学部教授 青木信之

昨年年末の12月16日(土)に本学語学センターにて、第6回「広島 CALL 研究会」が行われた。「広島 CALL 研究会」は、昭和40年代の初めに設立された「広島 LL 研究会」を引き継いだもので、コンピュータを利用して、いかに短時間に楽しく英語教育の成果を上げるかを研究する会である。

中学、高校、大学から、30名ほどの教員が参加する中、まず、世話人代表三浦省五氏(福山大学教授、広島大学名誉教授)より、開会の挨拶があり、その後、松岡博信氏(安田女子大学教授)が、「Moodle・KDシステム・eCALLソフトレコーダを用いたディクテーションとシャドーイングの連続音声演習」というタイトルで、ワークショップを行った。英語を聞き取り入力すると、その成績が自動処理され、誰が一番早いか、正確かといったデータがリアルタイムで表示されるというシステムで、参加者が我を忘れて本気で取り組む場面もあった。

その後、休憩を挟んで、参加者の方々に本学語学センターを紹介するためのツアーが、語学センター職員の協力で実施された。授業風景撮影機能、通訳者養成機能など様々な機能を持つ教室と自習室とを合わせてCALL教室を5室有する語学センターの紹介は、中学、高校から参加した教員に対して、生徒の進学先としてよいアピールとなったようであった。

次に、西巖弘氏(広島市立舟入高等学校教諭)より、「英語で議論できるまで一音読・暗誦・即興トレーニング」というタイトルで、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(通称、セルハイ)の取組について紹介があった。セルハイとは、文部科学省が、英語教育の先進事例となるような学校づくりを推進するため、英語教育を重点的に行う高等学校等を指定し、英語教育を重視したカリキュラムの開発、大学や中学校等との効果的な連携方策

等についての実践研究を実施するという目的で始めたもので、これまで全国で153校指定されてきた。先日、文科省主催の英語教育フォーラムの模擬授業実践校に、現時点でのセルハイ指定約100校から、ただ1校選ばれ、その発表の様子はTVや新聞でも報道された。

その後、青木(本学教授)より、「広島市立大学の英語教育改革」として、平成19年度より実施する、ネットワーク型英語学習プログラムを用いて大量の訓練を集中的に行う「CALL英語集中」と、能力別少人数クラスでスピーキングとライティングを徹底して指導する「英語応用演習」を組み合わせた英語教育カリキュラムについて、説明が行われた。

再び休憩をおいた後、渡辺智恵氏(本学助教授)より、「CALL利用英語集中訓練プログラムの正規英語科目への応用」という題で、上述のネットワーク型英語学習プログラムを用いた「CALL英語集中」科目について、実施方法や効果について詳細な説明がなされた。

最後に、能登原祥之氏(比治山大学助教授)が、「Blended Learning 環境の構築と授業運営」として、eラーニングと対面授業をいかに組み合わせれば、学生の動機の向上を促し、さらに英語力向上につなげられるかということについての実践報告を行った。

フロアからは、各発表後に設けられた質疑応答時間のみならず、全発表終了後も質問が相次ぎ、研究会終了後も発表者を囲んで参加者と熱心な意見交換がなされていた。



CALL 研究会の様子

上段:渡辺先生による発表

下段:研究会参加者

毎冬恒例! 映画上映会実施



去る12月11日~12月22日の2週間、語学センターでは毎冬恒例の映画上映会が開催されました。今年のテーマは「アニメ」で、みなさんにおなじみの「となりのトトロ」(英語上映)から普段鑑賞する機会の少ないロシアのアニメ「チェブラーシカ」(ロシア語上映)まで、多彩な全10タイトルをお送りしました。

今年の上映会は事前にアニメをリクエストし、リクエストのタイトルを中心に上映したためか、参加学生は47名と例年を大幅に上回る人数となり、大盛況の内に終わりました。感想文には「英語の勉強に役立った」「もっとリスニング力を上げたいと思った」など、外国語学習にアニメ鑑賞が一役買ったことが分かり、語学センターならではの上映会が達成できたと嬉しく思っています。



発行日 2007年3月30日
発行 広島市立大学語学センター
〒731-3194
広島市安佐南区大塚東3-4-1
編集 堀本真由美
伊達美和子(内線:6410)
Phone (082)830-1509
Fax (082)830-1794
E-mail lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp
ホームページ
<http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html>